

## イネスとケインズの貨幣論

著者	古川 顕
雑誌名	甲南経済学論集
巻	58
号	3・4
ページ	47-94
発行年	2018-03-30
URL	<a href="http://doi.org/10.14990/00002968">http://doi.org/10.14990/00002968</a>

# イネスとケインズの貨幣論

古 川 顕

## 要旨

貨幣の起源については実にさまざまな考え方があるが、アリストテレスの貨幣は共同体社会を構成する人々の「申し合わせ」ないしは「社会的合意」によって人為的に創造されたとの考え方が最も古いのではなかろうか。また、18世紀初頭にはジョン・ローが貨幣は物々交換の困難を克服するために自然発生的に生じたとの貨幣自生説を提起する。さらにアダム・スミス、マルクス、メンガーなどがローと同様の貨幣自生説を展開する。こうした見解は、現在に至る最も伝統的でオーソドックスな考え方であると言える。だが、こうした伝統的な見解を否定し、「信用」こそが貨幣に先立つ歴史的発展の起源であると最初に強調したミッチェル・イネスの見解も注目に値する。イネスは20世紀初頭、「貨幣とは何か」という一編の論文において、貨幣よりも信用が重要であり、しかも「信用は貨幣に先立つ」と主張する。さらにイネスは、その論文で『国富論』における「アダム・スミスの誤謬」を痛烈に批判する。ケインズはおそらくイネスの影響を受けて、「古代通貨論」という興味深い小冊子を書いている。この小冊子はほとんど注目されることはないけれども、そこでの考え方は彼の主著の一つ『貨幣論』に受け継がれている。

キーワード：貨幣起源説、物々交換、アダム・スミスの誤謬、計算貨幣、信用創造

## 目次

はじめに

- I 貨幣起源説の多様性
- II イネスの貨幣論とアダム・スミスの誤謬
- III ケインズの「古代通貨論」

おわりに

## はじめに

貨幣の起源について考えることは極めて興味深いものの、考察を進めるうちに実にさまざまな考え方が理解できる。貨幣の起源については、おそらく古代ギリシャの哲学者アリストテレスの、貨幣は共同体社会を構成する人々の「申し合わせ」（ないしは「社会的合意」）によって人為的に創造されたとの考え方が最も古いのではなかろうか。かなり時代は下がるが、18世紀初頭にジョン・ローが、貨幣は物々交換の困難を克服するために自然発生的に生じたとの貨幣自生説を提起する。この見解はアリストテレスの人為的な貨幣創造説とは正反対である。さらに時代は下って、アダム・スミスは『国富論』において、マルクスが『資本論』などで、やはりローと同様の貨幣自生説を展開する。物々交換の困難を解消するために貨幣が生成したという見解は、現在に至る最も伝統的でオーソドックスな考え方と言えよう。加えてクナップの貨幣国定説や貨幣の淵源を貝殻、家畜、贖罪、宗教などに求める実にさまざまな見解も併存する。このように貨幣起源説はまことに多様であり、今日においても、どのような仮説が最も説得的で重要であるかは決まっていないといっても過言ではない。ただし、貨幣の起源を物々交換の難点を克服するための交換手段の発生に求める伝統的・正統的な見解を否定する見方が次第に有力となっている。とりわけ人類学者や民族学者、考古学者などは、多くの歴史的・実証的な証拠に基づいて、物々交換の不存在を主張する傾向が強いようである。

ところで、物々交換に代替して貴金属など何らかの商品貨幣が発展するというのが、やはり最も伝統的な見解であると言えよう。古くはアリストテレスやアダム・スミスに、近くはケインズやサミュエルソンに代表される基本的な見解である。だが、こうしたオーソドックスな見解を否定し、「信用」こそが貨幣に先立つ歴史的発展の起源であるとおそらく最初に強調したイギ

## イネスとケインズの貨幣論

リス人がある。ミッチェル・イネス（Alfred Michell Innes: 1864-1954）である。イネスといっても、彼がどのような人物で、どのような業績を残したか、ほとんどの経済学者は、その業績はおろか、名前すら知らないだろう。イネスは20世紀初頭、「貨幣とは何か」というわずか一編の論文において貨幣よりも信用を重視し、しかも「信用は貨幣に先立つ」と主張する。さらにイネスはその一編の論文で、『国富論』における「アダム・スミスの誤謬」を痛烈に批判するのである。このイネスの「貨幣とは何か」と題する論文は、当時 *Economic Journal* の編集委員をしていたケインズの書評によって日の目を見たものであり、イネスとケインズの考え方の相違が歴然としている。短い書評ではあるものの、イネスやケインズの見解が浮き彫りにされているように思われる。イネスの論文は、その後のケインズの業績にも影響を与えているようである。周知のようにケインズは数多くの著作を残しているが、イネスが公表した論文への書評に次いで、ケインズは「古代通貨論」という小冊子を書いている。この小冊子は、研究者によっても従来ほとんど注目されていないようであるが、主に古代バビロニアを念頭においた貨幣の起源についての考え方が提示されている。

本稿の構成は以下のとおりである。まず第Ⅰ節では、物々交換をめぐる議論をはじめとして貨幣起源説の多様性について概観する。次いで第Ⅱ節では、これまでほとんど無視されてきたイネスの貨幣論を取り上げ、“アダム・スミスの誤謬”について、彼が的確に指摘していることを明らかにする。第Ⅲ節では、従来ほとんど顧みられることのなかったケインズの「古代通貨論」を組上に載せ、その特色とケインズ貨幣論のその後との関連、問題点などを指摘する。最後に第Ⅳ節では、それまで検討した貨幣起源説の多様性、イネスやケインズの貨幣の起源についての見解などについて要約する。

## I 貨幣起源説の多様性

貨幣がどのような役割を果たすのか、貨幣は何からできているのか、貨幣がどのようにして出現したのかという問題、すなわち貨幣の機能と貨幣の素材、貨幣の起源にかかわる問題は密接に関連し、これらは三位一体化しているといってもよいように思われる。こうした問題について体系的に整理することは容易ではないが、以下では貨幣の起源の視点からいくつかの代表的な考え方を紹介しよう。

確かなことは分からないが、貨幣の起源について最初に問題を敵視したのは、古代ギリシャの哲学者アリストテレス（紀元前384年—同322年）ではなかったかと思われる。アリストテレスは、貨幣はその共同体的社会を構成する人々の「申し合わせ」、あるいは「社会的合意」に基づいて人為的に創造された<sup>(1)</sup>と主張する。

---

(1) シュンペーターは『経済分析の歴史』において、アリストテレスについてこう語っている。「この理論 [金属貨幣説——引用者] は、決して挑戦を受けなかったわけではないが、その欠陥が何であろうと、19世紀の末に至るまで、否それ以後に至るまで、実質的に支配的なものであった。それは貨幣の分類における分析的研究の大部分のものの基礎である。したがってわれわれは少なくとも、遠くアダム・スミスに至るまで、この問題に関してその個人的影響が認められるアリストテレスについての、われわれの解釈を確実なものたらしめるべきあらゆる動機を持つものである」(Schumpeter [1954] 邦訳 (上) 109ページ)。まさに最大級の賛辞である。だが、アリストテレスの見解に対して否定的な見方も皆無ではない。例えば、次のような見解を紹介しておこう。「古代の経済の市場がよく発達していたにせよ、あまり発達していなかったにせよ、それは交換と貨幣についてのアリストテレスの理論の評価にとって決定的なものではない。というのは、その理論はまず第一に、どのような現実の市場にとって提供するものはほとんどないし、それに対する関連性をまったく持っていない。この理論においては、直接的交換と間接的交換との区別はないし、物々交換の特性と貨幣的關係の分析はまったくなく、非貨幣的商品とは異なる貨幣商品概念も分析もなされていない」(Fayazmansh [2006] p.23)。「しかし貨幣理論においては、われわれはアリストテレスが間違っていたことを証明する実験に訴えることはできない。それにもかかわらず、われわれは依然として貨幣の歴史、貨幣の慣行、そしてガリレオがしたように、アリストテレスのアイデアは

こうした社会合意説ないし社会的契約説という人為的な貨幣起源説と正反対の考え方を最初に打ち出し、貨幣が物々交換の困難を克服するために自然発生的に生じたとの考え方を最初に提起したのは、おそらくジョン・ロー(1671-1729)であろう。ローは『貨幣と交易の考察』という小冊子において、経済学の歴史に残る貨幣理論を展開している。彼は次のように述べている。「貨幣の使用が知られる以前には、財は物々交換ないし契約によって交換され、契約は財の形で支払いがなされた。このような物々交換の状態は不便であり、不利であった。第1に、物々交換を望む人は必ずしもその人が保有する財を望む人々を見出すとは限らないし、第2に、財で支払いがなされる契約は、同じ種類の財といえども価値が異なるがゆえに不確実である。第3に、財相互間の価値の比率を知ることのできる尺度がない」(Ibid., p.5)。こうしてローは物々交換に伴う困難を述べたうえで、銀を貨幣として用いる次のような5つのメリットを指摘する。①銀はその品質が確実で、価値の標準として適している。②引き渡しが容易である。③場所の如何にかかわらず同一の、あるいはほとんど変わらない価値を持ち、持ち運びが容易である。④広い場所を占めず、耐久性を持っているから、損失や費用なしに保有しうる。⑤損失なしに分割することができる。すなわち、「貨幣はこうした品質を持っているので、それが鑄造されなくても貨幣として用いられると考えるのは当然である。貨幣として用いられるとは、銀地金が財の価値を評価する尺度であり、その尺度によって財が交換され、契約が履行されるという意味である」(Law [1705] p.7)<sup>(2)</sup>。信用創造理論のパイオニアであり、いわゆる「ロー・シ

---

現実の世界と両立し難く、内部的にも首尾一貫していないことを示す論理に訴えることはできる」(Ibid.)。そして結局、「アリストテレスの貨幣および交換に関する推測は一般に歴史および現実とは両立し難いと結論される」(Ibid., p.4)というのである。なお、アリストテレスの貨幣起源説については古川 [2017b] を参照されたい。

(2) ローについては、古川 [2015a] および同 [2015b] を参照されたい。

システム」を導入したスコットランド人は、アリストテレスに代表される「社会的合意説」ないし「社会的契約説」という人為的な貨幣起源説に異を唱え、貨幣が物々交換の困難を克服するために自然発生的に生じたとの貨幣自生説を主張する。それと同時に、貨幣は金・銀のように素材自体が価値をもつ商品、すなわち金属貨幣（ないし商品貨幣）である必要はなく、交換手段として機能するものは何であれ貨幣であるという、当時としては極めて独創的な理論を打ち出し、貨幣経済学の新しい展望と沃野を切り開いたのである。

次に、よく知られたアダム・スミスの貨幣起源説を追ってみよう。スミスは『国富論』の冒頭において、「分業」が近代社会の発展の原動力であること、その分業を引き起こすのは「交換」であり、分業の大きさは「交換」の力の大きさ、すなわち市場の広さによって制約されること、そしてその交換を円滑にさせる「普遍的手段」として「貨幣」が生成した、との自説を展開する。スミスは人々の分業が必然的に交換を招くというのであるが、交換が成立するのはそれほど容易ではないとして次のように述べている。「分業が発生し始めた当初は、こうした交換の力はしばしばその作用を大いに妨害されたに違いない。ある人がある商品を自分で必要とする以上に持っているのに、他の人はそれを持っていない、と仮定しよう。すると前者は、この余剰物の一部をよろこんで手放すだろうし、後者もそれをよろこんで購買するだろう。ところがもしこの後者が、前者が必要とするものをたまたま何も持っていないなら、彼らの間にはどんな交換も行われるはずはない」(Smith [1789], 邦訳『国富論 I』40ページ)。物々交換が成立するためには、いわゆる「欲求の二重の一致」(double coincidence of wants) が成立することが不可欠の要件であるからである。このために「交換の力はしばしばその作用を大いに妨害された」のである。スミスはこう述べている。「このような事態の不便を避けるために、社会のあらゆる時代の世事にたけた人たちは、分業が初めて確立されたあと、おのずから事態を次のようなやり方で処理しよ

うとつとめたに違いない。すなわち、世事にたけた人は、自分自身の勤労の特定の生産物のほかに、ほとんどの人が彼らの勤労の生産物と交換するのを拒否しないだろうと考えられるような、何らか特定の商品の一定量を、いつも手元に持っているというやり方である」(Ibid., 邦訳40ページ)。こうした「ほとんどの人が彼らの勤労の生産物と交換するのを拒否しないだろうと考えられるような、何らか特定の商品」とは、一般受容性を有する交換手段としての「貨幣」であることはいうまでもない。スミスはこのようにして「貨幣の起源」について説明し、具体的に貨幣の役割を果たしたものとして、社会の未開の時代の家畜に始まり、金属貨幣が長期にわたって用いられるようになった経緯について詳細に検討する。そして、「貨幣がすべての文明国民において商業の普遍的用具 (universal instrument of commerce) となったのは、このようにしてであって、この用具の媒介によって、すべての種類の財貨は売買され、相互に交換されるようになったのである」(Ibid., 邦訳48ページ、傍点は引用者)と結んでいる。かくてスミスにおいては、貨幣は物々交換の不便を克服する手段として登場し、「流通の大車輪」(Ibid., 邦訳442ページ)として経済の発展に大きく寄与したとみなすのである。こうした考え方が踏襲され、現代における「貨幣の起源」についての標準的な見方を形成してきた。

またソーントン (Henry Thornton: 1760-1815) は、『紙券信用論』という有名な著作の中で次のように述べている。「未発達の状態における社会は物々交換の方法によってのみ商取引を行う。社会が最も進歩した社会においてもそれは商業を同一の原理に基づいて行う。というのは、金や銀の鑄貨も銀行券も為替手形等も、単に物々交換を促進する目的で使用される手段にすぎないと考えられるだろうからである。その目的とするところは、ある種の商品の一定量を多種商品の一定量 [あらゆる状況のもとにおいて妥当な等価物と認められるもの] と交換することにある。物々交換はまもなく不便であるこ



とが感じられるようになり、貴金属類が価値の尺度として用いられるようになる。第一に、貴金属は携帯に便利であるし、価格の変動も少なく、また分割可能であるからである。国家は各個片の量と純分とを証明するために貴金属に刻印を捺しつける」(Thornton [1802] 邦訳49-50ページ)。なお、ソントンはその当時(18世紀後半)、すでに多額の決済が銀行券を授受することなしに銀行の帳簿上の振り替えによって行われていた事情を説明するとともに、こうした帳簿上の決済が今後ますます頻繁に行われるであろうことを予測している(*Ibid.*, 邦訳50-60ページ)。ジョン・ステュアート・ミル(J. S. Mill: 1806-1873)も、ソントンを引用しながら、債権・債務の相殺に基づく決済を指摘している(J. S. Mill [1878] pp. 530-531)。またトゥック(Thomas Tooke: 1774-1858)は『通貨原理の研究』においてこう指摘している。「銀行券は、商品間の交換にとって必ず必要だというわけではない。そればかりでなく、そのような交換がどういう具合に行われるかを、ほんの少しでも知っている人なら、大口の売買取引には、銀行券は事実めったに使われないことぐらいは、誰でも知っているに違いない。イギリスのたいいていの卸売取引は、債権・債務の清算、相殺によって続けられ、調節されている」(Tooke [1844] 邦訳48ページ)。

一方、マルクス(1818-1883)の貨幣起源説は、『資本論』に先立つ『経済学批判序説』や『経済学批判要綱』において比較的分かりやすく説明されている。マルクスは、『経済学批判序説』において次のように述べている。「貨幣は熟慮や合意の結果ではなく、交換の過程で自然に生まれ出たものであるから、多くの異なった、多かれ少なかれ不適切な商品がさまざまな時代に貨幣として用いられた。交換がある発達の段階に達すると、さまざまな商品の間の交換価値と使用価値の機能を分離させる必要が生じ、それによって例えば、ある商品が交換手段として働く一方、別の商品が使用価値として用いられるようになる。その結果、最も共通の使用価値を表わす一つの商品あるい

は時々はいくつかの商品が時折、貨幣として役立つようになる」(Marx [1970] p. 49)。次にマルクスは、『経済学批判要綱』において次のような見解を披露する。「国家が協定によって発生しないのと同様、貨幣は協定によって発生しない。貨幣は、交換から交換のなかで自然発生的に生じており、交換の所産である。……すなわち、欲望や消費の対象ではなく、再びそれを他の商品と交換するために交換に持ち込まれる、塩、毛皮、家畜、奴隷がそのような商品であった。そのような商品は、實際上商品としての特殊な形態において、他の商品よりも交換価値としての自分自身に適合している」(Marx [1857-1858] 邦訳86ページ)。すなわち、貨幣は人為的な産物ではなく、人々の交換を通じて自然発生的に生成するという伝統的な見解が述べられる。こうした貨幣の起源に関するマルクスの見解は、『資本論』においても基本的には変わらない。

メンガー (1840-1921) は、有名な貨幣の起源に関する論文の冒頭で次のように述べている。「古くから、そして異常なほどに、社会哲学者や実地的な経済学者の注意を引きつけた現象がある。その現象とは、ある種の商品(これらは、進歩した文明諸国で鑄造された金や銀の金属片)が、その後のそうした鑄貨を象徴する[紙券貨幣という]証書と相まって、一般的に受容される交換手段となるという事実である。最も通常の知性にとってさえ、ある商品が他のもっと有用なものと交換にその所有者によって断念されるのは明白である。けれども、一国のどんな経済主体も、彼の財を明らかに有用でない小さな金属片やそれを象徴する証書と進んで交換するのは、普通の物事の道筋とはまったく正反対の行為である」(Menger [1892] p. 239)。メンガーによれば、古くから金属片や紙券、とくに金や銀などの貴金属が貨幣(交換手段)として流通するようになったのは、一般的な慣行や法制度によるのであり、鑄貨の形状やそれに捺された刻印は国家の法令の象徴であるとみなされてきた。「事実、それがアリストテレスおよびローマの法学者、中世の著

述家によって密接に引き継がれてきた見解である。貨幣の理論におけるより近代的な発展でさえ、実質的にこの立場を越えてはいない」(Ibid., p. 241) と述べ、「貨幣は経済主体の合意の産物でもなければ、立法的行為の産物でもない。誰もそれを発明しなかつた」(Menger [1976] p. 262, 傍点は引用者) と主張する。「誰もそれを発明しなかつた」というのは、貨幣の生成に関するメンガーの考え方を知る限り、言い得て妙である。<sup>(3)</sup>この他、別稿で詳述したが、「貨幣は法制の創造物である」とするクナップ (Knapp) の貨幣国定説や貨幣の起源を宗教との関係に求めるさまざまな見解など、貨幣起源説はまことに多様である。<sup>(4)</sup>以下では、物々交換の困難を克服するために貨幣が生成したとする伝統的・正統的見解と、それを否定する見解に絞ってなるべく簡単に検討することにしよう。

サミュエルソンは有名な教科書『経済学』において、貨幣の起源として物々交換の不便を克服するために取引に参加する人々の間の共通の交換手段として「貨幣」が用いられるようになったという。「古典的な経済学上の表現を使うなら、欲求の偶然の一致 (a double coincidence of wants) が二重に重なるよりも、偶然の一致が一つも生じないという可能性のほうが大きい。すなわち、空腹の裁縫師が、十分な小麦を持ちズボンを求めている農民を見出さないのでなければ、物々交換のもとでは、両者とも取引はできないのである」(Samuelson [1948] 54ページ)。「もし仮説的・論理的な線に沿って歴史を再構築しようとするならば、当然ながら、物々交換の時代の後に商品貨幣の時代が続くことになる。歴史的には非常に多くの種類の商品が一度ならず交換手段として使われてきた。例えば、「牛 (それはラテン語では pecus なので、これが語幹となって pecuniary [金銭上の]) という字ができていし、また

---

(3) ロー、マルクス、メンガーについては、古川 [2016] および同 [2017a] を参照されたい。

(4) クナップについては、古川 [2018] を参照されたい。

capital [資本] や chattel [所持品] という言葉も cattle [牛] から出ている), タバコ, 皮革, 毛皮, オリーブ油, ビールまたはワイン, 奴隷または妻, 銅, 鉄, 金, 銀, 指輪, ダイヤモンド, 貝殻玉あるいは貝殻, 巨大な岩や陸上の標識, 巻タバコなどがそれである」<sup>(5)</sup> (*Ibid.*)。おそらく以上が貨幣の起源につ

(5) サミュエルソンは「貨幣の歴史」の説明として、まず物々交換から始めて、スタンリー・ジェヴォンズのいう「欲求の二重の一致」に言及し、具体的な事例を用いて、「欲求の二重の一致」と呼ばれる事態は極めてありそうもないことなのである」という。「幅広く取引をしたような社会では、物々交換がはらむハンディキャップを到底克服できなかったために、広く一般に受け入れられる交換手段である貨幣が現れてきた」(Samuelson [1989] 邦訳219ページ)と説明する。そして次に商品貨幣の出現について述べている。「交換手段としての貨幣が人類の歴史の上で最初に出現したのは商品の形においてである。非常に数多くのものが、それぞれ一度は或る時期に貨幣として使われてきた。たとえば、牛、オリーブ油、ビールまたはブドウ酒、銅、鉄、金、銀、指輪、ダイヤモンド、巻きタバコなどがそれである。上記のそれぞれには、長所もあれば短所もある。牛は釣銭用に細かく分けることはできない。ブドウ酒は保存によって質がよくなるかもしれないが、ビールはそうはいかない。オリーブ油は思う存分細かく分けることのできる格好の液状通貨をなすが、その扱いが少々面倒だ、といった具合である。19世紀にもなると、商品貨幣はほとんどもっぱら金属に限定されてきた」(*Ibid.*)。おそらく以上が貨幣の起源について語られる典型的なストーリーであり、伝統的・正統的な見解ではなからうか。なお、『経済学』の初版と最終版を比較すると、後者では、タバコ、皮革、妻、奴隷、貝殻玉、大きな岩や陸上の標識についての記述がカットされている。やはり時代に合わないとか、記述が適切ではないとかいった理由が考えられる。

サミュエルソンに先立って、ラフリンは貨幣の起源についてこう主張している。「理屈の上では、価値の標準としての貨幣の使用は交換手段としての使用に先行すべきである。というのは、交換の事実、その前提として評価の行為を要求するからである。物々交換の野蛮な状態では、交換に直接に提供される2つの商品の間に、第3の、あるいは標準の商品を参照することなしに、確かに大まかな評価がなされたかもしれない。しかし2つないし3つ以上の商品が交換の分野に入ってくるや否や、共通の物差を参照することが避けられなくなった。したがって、認められた望ましい商品の価値を推定する必要性が生じたのである。……標準の概念の発展は、交換手段の概念よりも先行したに違いない」(Laughlin [1921] pp. 6-7)。「実際、貨幣の全歴史は、最初に標準として選ばれた商品を交換手段として使用する傾向が存在することを示しているように思われる」(*Ibid.*, p. 7)。「物々交換の時代の最も重要な特質は交換手段の欠如であり、標準はすでに物々交換の初期の時代に発展したことを示す相当な歴史的証拠が存在する。もしそうなら、標準機能は交換手段機能に先行したに違いないという主張は、歴史的調査によって支持されるのである」

いて語られる典型的なストーリーであり、伝統的・正統的な見解ではなからうか。

貨幣が物々交換の困難を克服するために自然発生的に生じたとの考え方（以下、物々交換仮説と呼ぶ）は、無数と言ってもよいほど存在する。だが、こうした物々交換仮説に対する反論も数多い。そうした文献をいくつか紹介しよう。

ダルトンとデイビスはいずれも物々交換の存在を否定する。先ずダルトンは次のように述べている。「[物々交換の] 例として間違っているのは、広範な物々交換の状況が、時間や場所を問わず、かつて実際の世界の経済に現実に存在したと仮定することである、すなわち、市場交換は貨幣が使用される

---

(*Ibid.*, p. 8, 傍点は引用者)。「物々交換の時代の最も重要な特質は交換手段の欠如であり、標準はすでに物々交換の初期の時代に発展したことを示す相当な歴史的証拠が存在する。もしそうなら、標準機能は交換手段機能に先行したに違いないという主張は、歴史的調査によって支持されるのである」(*Ibid.*, p. 8, 傍点は引用者)。

こうした物々交換の存在を重視する見解に対して、その存在を否定する見解も数多い。ここでは、次のような指摘だけを引用するにとどめよう。「物々交換の機会がまったく自発的に生じ、そして純粋な偶然によって次には再び決して生じないというのは比較的珍しい。人々はしばしば後に取引を繰り返すことを望んだり、その必要が生じるものである。……商品が特定の時機に特定の場所で既知の人々と交換しがちである。それゆえ、将来に交換が繰り返されるように公正に、すなわち取引の相手を満足させるように行動する固有の傾向が存在する。このことは、物々交換が遅延ないし信用の可能性を含むならば、それだけいっそう物々交換は機能的である。したがって物々交換が同時である場合、人々は公正な取引との評判を得ようとするだろうし、時間的要素が入り込む場合、その目的は信用できるということになるだろう」(Humphrey and Hugh-Jones [1992] pp. 8-9)。「信用は信頼を意味する (Credit implies trust)。したがって同時的な物々交換はおそらく信頼なしで済ます経済的取引は、物々交換は減多にない一回限りの取引であるから、社会生活におけるその現実的な作用は、フェアプレイと信頼を創造するように働かなければならない」(*Ibid.*, p. 9)。「物々交換はその体系においてどんな信頼も存在しない極端なケースであり、それゆえ取引者は負債を貯め込むことは許されないだろうし、彼らが結局は欲しくない商品を引き受けることを望まないだろう。貨幣的交換の場合は、取引者は交換手段を信頼する。……貨幣的交換は、取引者が他の取引者がある将来時点で商品と交換に貨幣を受取ると信頼するときに可能である」(*Ibid.*, p. 10)。

ようになるまで、かつて頻繁に行われ、量的にも重要である、ないしは自然的資源、労働、財およびサービスのかなり大きい範囲にわたって行われ、その重要な市場部門は貨幣が存在する以前に存在したと仮定することである」(Dalton [1982] p. 183)。「貨幣なき市場交換 (moneyless market exchange) という厳密な意味での物々交換は、われわれが確実な情報を持っているどのような過去ないし現在の経済システムにおいて、決して量的に重要ではなかったし、取引の支配的なモデルでもなかった」(Ibid., p. 185)。「結論的に述べるならば、貨幣なき市場的交換は、市場的交換の貨幣的手段の生成に先立つ取引の支配の様式という意味では、一つの発展段階を画するものではない。物々交換は過去においても現代の経済的制度においても非常に広範に生じるが、それは物々交換を行う者による特別の理由のために用いられる常にマイナーな、散発的な、急場しのぎに用いられた取引である」(Ibid., p. 188)。

デイビスもこう主張する。「物々交換の説明の大部分は、貨幣に関する現代の教科書に典型的に見られる基本的な事例を提供するためになされてきた。これらの説明は、物々交換の不便を過度に強調するだけでなく、このミスリーディングで狭隘な、間違った見解でもって貨幣発生を基礎付け、他の要因を排除しがちであった」(Davis [1994] pp. 9-10)「(今日では) 専門家の多くの共通の認識は、物々交換が貨幣の起源や最も初期の発展における要因ではないということである」(Ibid., p. 23)。

さらにポスト・ケインジアンとして知られるレイは、やはりアダム・スミスやサミュエルソンによって定型化された物々交換の歴史的存在を否定して次のようにいう。「物々交換に基づいた市場 (ささいな戦争の捕虜のケースは別にして) というのは存在しないし、貨幣の起源についてのあらゆる証拠は、国家との関わり合いを示している。このことは、私的な貨幣は決して存在しなかったし、金融システムの発展における政府の役割を過大に主張するのも私の意図ではない。しかしながら、私がここで議論しようとするのは、

最初から、ケインズが議論したように、“真に重要である”計算単位として機能するものの決定に際して政府が重要な役割を果たしたということである。私は貨幣の起源についての歴史的な説明は簡単にとどめることにする。というのは、これは興味が無いからではなくて、むしろそれは主な関心である近代貨幣に接しているからである。たとえ貨幣の起源についてのサミュエルソンの筋書きが真実であるにしても（そうではない）、すべての近代国家は、サミュエルソンの貨幣としての“タバコ、毛皮そして妻”というよりも、不換紙幣をもたらしている。しかし歴史についての何らかの知識は、いわゆる近代貨幣ないしは国家貨幣と呼ばれるものに照明を当てるのである」(Wray [2000] p. 42)。「人類学的な証拠は、慣習的な話を支持する試みにおいてしばしば用いられる。例えば、種族間の交換、あるいは原始的な価値物の交換を通じる種族内の妻たちの“購入”は、物々交換ベースの市場交換の話を支持するために提供される。それに対して、“交換手段”としての子安貝の貝殻、あるいは巨大な石貨（ヤップ諸島のケースのように）の使用は、古代の貨幣の起源を論証すると推測される。しかしながら、詳細に調査すると、これらの事例は市場と貨幣の起源についてのサミュエルソン仮説を支持しないのは明らかとなる」(Ibid., p. 43)。「種族社会における交換は、本質的に儀式的なものであり、当然の結果として、互惠主義（に基づく交換）の習慣は、取引者の利益を最大にするよりはむしろ、種族の成員をより親しく結びつけるように意図されたものであった。実際、取引の参加者は通常、交換される品物の選択はまったくなく、そうした交換の多くの目的は、富を平等にすることであった。相対的な諸価格は決して市場の競争の影響に晒されず、習慣によって決められた」(Ibid.)。「教科書的な筋書きは、特定の貴金属がまさに物々交換の取引費用を減少させる選択に依存する。しかしながら現実には、消費者は重量や名称、純度および精巧さなどがさまざまな膨大な数の鑄貨に直面してきた。こうした社会の典型的な成員が、例えば牛の価値よりも鑄貨

の価値をもっと評価することができたであろうと信じることは困難である。貴金属を用いることによって取引費用を減少させるよりも、おそらく牛を使用する取引費用をより減少させたであろう」(Ibid., p. 45)。結局、物々交換の存否に関する近年の考え方を一口で言えば、「サミュエルソン（およびその他多くの学者）によって広められた憶測に基づく貨幣の歴史は、すべての本格的な歴史家や人類学者によって却下されている」(Wray [2003] 邦訳63ページ、傍点は引用者)。

カリムサディ (S. Karimzadi) はこう述べている。「その圧倒的な優勢と評判にもかかわらず、われわれは他と区別してうまく定義された物々交換経済ないし原始共産的経済システムについての何の証拠も持っていない。そうした社会の特徴は経済学者や人類学者によって報告されてきたが、これらの特徴は非常に曖昧で一般的であり、決定的であるとはみなされ得ない」(Karimzadi [2013] p. 219)。「物々交換の時代と定義しうる、そしてはっきりとその境界を示しうる歴史的な時期は存在しない。それは単に実在しない憶測的なモデルにほかならない。物々交換についての経済学者の記述に適合する経済システムは、何ら歴史的な先行をもたない。……貨幣の起源についての伝統的な理論は、この「物々交換という」思考過程に囚われている。皮肉なことには、想定のコアは尊敬されるけれども、同時にどの経済学者もその理論がまったく不満足であることを見出している。一般に承認された知恵では、いつ、どのようにして、そしてなぜ貨幣が存在するようになったかをわれわれに語ることはできない」(Ibid., p. 243、傍点は引用者)。

ハンフリーは次のように述べている。「物々交換は、まさに近代経済理論の礎石であり、プラトンおよびアリストテレス以降の政治的正義についての古代の議論の主題である。両者の議論は、関係はあるけれどもまったく異なっており、物々交換は貨幣の出現にとっての想像上の前条件を与える。なぜ人類学者は想像される状態からの論理的推論に興味を持つのだろうか。物々



交換経済について純粹で單純な事例が記述されたことなどない。物々交換からの貨幣の出現についてはなおさらである。入手可能なあらゆる民族誌が、そんなものは存在していなかったことを示している」(Humphrey [1985] p. 48, 傍点は引用者)。まだまだ物々交換を否定する論者は多いが、上に指摘しただけで充分であろう。

結局、物々交換仮説についての近年の考え方を要約すれば、次のようにいうことができると思われる。

- ①時代が下るにつれて物々交換仮説への批判が増加している。
- ②人類学者・民俗学者などは、圧倒的に物々交換仮説を否定し、批判する傾向がみられる。
- ③現地調査を伴う実証的分析を行う研究者(人類学者・民俗学者など)には、物々交換仮説を批判する傾向があり、これに対して演繹的手法に依拠する研究者(経済学者など)には物々交換仮説に立脚する研究者が多い。

もちろん、以上の指摘は必ずしも一般的であるとは限らない。次節では、イネスとケインズを取り上げ、貨幣が物々交換の不便を解消するために生じたという物々交換仮説に批判的な前者と、これに肯定的な後者の見解を検討することにしたい。

## II イネスの貨幣論とアダム・スミスの誤謬

前節で述べたように、物々交換に代替して何らかの商品貨幣が発展するというのが最も伝統的な考え方であると言える。古くはアリストテレスやアダム・スミスに、近くはサミュエルソンに代表される基本的な見解である。こうしたオーソドックスな見解を真っ向から否定し、信用(credit)こそが貨幣に代る歴史的発展の起源であることを最初に強調したのはイネス(Alfred Michell Innes: 1864-1950)である。イネスといっても、経済学者でさえほ

## イネスとケインズの貨幣論

とんど名前すら知らないのではなかろうか。ごく簡単にイネスの経歴を紹介する。1864年にイングランドで生まれ、通常的高等教育は受けず、私費の個人教育を受ける。1890年、英国外務省に入省。翌年、外交官として初めてエジプト・カイロに派遣される。1896年にはシャム（タイの旧名）国王の金融アドバイザーとなり、1899年にはエジプト財務省の次官に指名される。1908年から1913年までワシントン D.C. の英国大使館の参事官として従事。1913年から1919年までウルグアイ（Uruguay）の大臣・全権大使として勤務。1919年に退職する。退職後、さまざまな調査活動に従事し、1950年に逝去する。イネスが生涯を通じて出版した唯一の著書は、『われわれの時代の殉教』（*Martyrdom in Our Times*）と題するもので、監獄、犯罪、正義などの諸問題を取り扱っている。<sup>(6)</sup>以下で論じるイネスの2つの論文とはまったく異なった内容の著書である。ワシントンに滞在中、イネスは貨幣と信用に関する2つの論文を執筆する。1913年に公表された「貨幣とは何か？」と題する論文（以下、第1論文と呼ぶ）と、翌年に公表された「貨幣の信用理論」と題する論文（以下、第2論文と呼ぶ）である。本節では、彼の中心となる主張が盛り込まれている第1論文を中心にイネスのユニークな考え方を検討し、あわせてこの論文についてのケインズの書評を取り上げることにしよう。

イネスは第1論文において、物々交換は交換手段としての商品貨幣に取って代われ、その後に信用が商品貨幣に代替するという伝統的な考え方を全面的に否定する。イネスによれば、貨幣がたとえ貴金属という物理的素材からできているとしても、「貨幣は本質的に信用である」という大胆な仮説を提示する。

このイネスの仮説を論じる前に、彼自身による「信用」の定義を明確にしておくことが必要であろう。イネスは、「ここで、“信用”という言葉の根本

---

(6) イネスの経歴については Wray and Bell [2004] を参照されたい。

的で商業的ないし経済的な意味を説明することが必要である」(Ibid., p. 35)として次のように述べている。「それ(信用)は負債の相関語(correlative)にはかならない。AがBに負うものはAのBに対する負債であり、BのAにおける信用である。AはBの債務者であり、BはAの債権者である。“信用”と“負債”という言葉は、2人の当事者間の法的関係を表し、それらは2人の反対側から見られる同じ法的関係を表すものである。Aはこの関係を負債と呼び、一方Bはそれを信用と呼ぶ」(Ibid.)。普通、「信用」という用語を真正面から定義する経済学者はほとんどいないだけに、イネスというのは非常に生真面目な人物であるという印象を受ける。

ホートレーもまた「信用」について定義している数少ない一人である。彼はその著『通貨と信用』においてこう述べている。「マクラウド(H. D. MacLeod)が強調したように、負債と信用は同じものの別称である。債務者に対するものは負債であり、債権者に対するものは信用である」(Hawtrey [1919] pp. 3-4, 傍点は引用者<sup>(7)</sup>)。ホートレーが明示していないそのマクラウドの表現を追ってみると次のような記述がみられる。「人々が他の人々に生産物を販売したりサービスを提供したとき、彼らは同時に同額の生産物やサービスを受け取るか、あるいは将来に等価物を要求する権利を受け取る資格がある。その場合、この権利は2つの形態、すなわち商業社会全体からどのような等価物でも要求する一般的な権利である金属貨幣あるいは生産物やサービスを受け取った特定の人から等価物を要求する権利の、いずれかの形態をとる。後者の種類の権利は通常、信用と呼ばれるものである。したがって、いずれのケースであれ、債権者は何らかの権利を受け取る資格がある」(MacLeod [1902] pp. 43-44)。「唯一の違いは、一方はその権利が一般的で永続的であり、他はそれが特定で不安定であるということである。しかし、

---

(7) ホートレーについて詳しくは古川 [2012] を参照されたい。

どの場合もそれらは明らかに同じ性格のものである。それゆえ、貨幣と信用は同質の分量であり、貨幣は信用のうちで最も高次の最も一般的な形態であると言える」(Ibid.)。すなわちマクラウドによれば、貨幣とは財やサービスの販売によって社会全体から躊躇なく受容される一般的で永続的な形態、具体的には金属貨幣の形態をとるのに対して、信用は財・サービスを販売した特定の相手から個別的で不確かな等価物への請求権の形態をとるというのである。<sup>(8)</sup>

さてイネスに立ち戻って、彼が信用を重視する論拠についてみてみよう。イネスはこう述べている。「紀元987年のカペー王朝 (Capetian dynasty) 勃興の時代以来、硬貨鑄造ないし支払いをするのに用いられるわれわれの知識は、絶えず明確になってきた。近代フランスの歴史学者の研究は、情報というわれわれの資産に入り込み、その知識は、貨幣の諸問題に対する適切な理解にとって絶対的に不可欠であるが、それは不幸にも経済学者によって無視されてきた。その結果、彼らの声明は歴史的事実についての間違った見解に基づいており、そして金属本位制が実在するという信念は、事実の歪曲によっ

---

(8) マクラウドについては、レイおよびインガムの次のような指摘を紹介しておきたい。「多くの著作家はもちろん、ある信用手段が“貨幣”という言葉に含まれなければならないと主張した。しかしマクラウド——科学的に銀行業と信用を取り扱ったほとんど唯一の経済学者であると私には思われる——はただ一人、貨幣は信用と同一であると理解したのである。……マクラウドは彼の時代に先立って、正確な歴史的知識の不足は、信用は最も初期の金属鑄貨の使用よりもっと古いと理解することを妨げたと書いたのである。それゆえ彼のアイデアは、それら事態をまったく明らかにせず、彼は販売と購入が商品の信用との交換であり、一片の金属ないし他のどんな有形の資産との交換ではないという基本的な理論を組み立てることができなかった。その理論には、貨幣についての全体科学の本質が横たわっている」(Wray (ed.) [1914] 62ページ)。「イネスは、マクラウドのような初期の著述家が貨幣の本質的性質を貴重な商品にあるのではなく、抽象的価値の尺度として認識した。そして彼は、ホートレーのような同時代の信用理論家に言及する。しかし彼は、名目主義者および信用理論の限界と継続性には気が付いていないように思われる」(Ingham [2004] pp. 157-158)。なお、マクラウドについては古川 [2013]、同 [2014b] を参照されたい。

てのみ可能であったにすぎないのである」(Ibid., p. 29ページ, 傍点は引用者)。「信用は貨幣の主要な特質の一つとして, しばしば経済学の著書に述べられる購買力である。そして私は, 信用, 信用のみが貨幣である (“credit and credit alone is money”) ことを示したいと思う。金や銀でなく信用は, すべての人々がそれを取得しようとするあらゆる商業の究極の目的であるところの一つの資産なのである」(Ibid., p. 36, 傍点は引用者)。「信用は現金よりはるかに古い (credit is far older than cash) ということは疑問を挟む余地がない」(Ibid., p. 39, 傍点は引用者)。「鑄貨, 証書, 銀行券および銀行の帳簿上の信用は, 形態や内在価値 (intrinsic value) の違いはあるにせよ, その本質においてまったく同一である。大変貴重な宝石や価値のない一片の紙幣も, 受取人がそれが何を表すかを知っており, 差出人が彼の負債を支払い期日に返済することを認める限りは, 同様に負債の象徴なのである。そうであるとする, 貨幣は信用であり, 信用以外の何物でもない (“money is credit and nothing but credit”）」(Ibid., p. 45, 傍点は引用者)。以上のようにイネスは, 商品の価値が金属の単位で測られる金属本位制の存在を否定し, 貨幣よりも信用の重要性を強調する。というより, 「信用のみが貨幣である」, 「信用は貨幣 (現金) よりはるかに古い」というのである。従来の常識的な考え方に比べると, イネスの見解がいかに大胆であるかは明らかであろう。

さらにイネスは, 銀行の保有する現金その他の支払い準備について次のように述べている。「銀行の貸出能力と支払い能力 (solvency) はこうした準備に依存する。実際, このことはあまり明確にかつ強調して述べられないが, 法律で認められた貨幣 (lawful money) であるこれらの準備は, 科学的な観点から見て, 他のどのような銀行資産にも増して重要である」(Ibid., p. 47)。こうした銀行の支払い準備の確保による健全性を重視するイネスの主張は, 当時としては非常に珍しいと言える。こうしてイネスは, 貨幣の本質はその内在価値にあるのではなく信用にあること, 従来のように, 貨幣の本質を鑄

貨の内在価値から説明するのではなく、信用から把握すること、铸貨も信用貨幣に含まれること、銀行の支払い能力ないしその健全性を重視すべきであるといった一連の主張を展開する。

ところでこれまで繰り返し述べたように、従来の伝統的な見解によれば、経済発展の進展につれて、「欲求の二重の一致」を必要とする非効率的な物々交換システムに代わって、一般に受容される交換手段が支配的となる貨幣システムに転換する。イネスは、こうした貨幣の発展過程の単純な記述を問題として、「これらの理論のいずれも歴史的な証拠の厳密な基礎に基づいていない——実際それらは事実に反するというのである」(Ibid., p. 23)。従来の伝統的な考え方を覆し、「信用は貨幣(現金)に先立つ」という上に引用したイネスの見解は、まさに従来の伝統的な考え方のコペルニクス的転回とも言えるだろう。

ケインズは、当時自らが編集委員を務めていた *Economic Journal* 誌においてイネスの第1論文を取り上げるが、「信用は現金(貨幣)よりはるかに古い」、換言すれば、「信用は貨幣に先立つ」と喝破するまったく無名の研究者の一言は、おそらく評者としてのケインズを驚かせたことであろう。イネスの論文に対するケインズの手紙は、次のような記述から始まっている。「この論文の著者は、貨幣の理論においてマクラウドの継承者である。誤り——もし私がこの信用の効果についての理論が誤っていると考えるのが正しいのであれば——は常套的なものであって、この手紙においてそれを議論するには値しないだろう。以下に示されるように、論文の明確な価値は異なった源から生じているもので、著者の力量は理論的なものというより歴史的な側面にある」(Keynes [1914] p. 419)<sup>(9)</sup>。すなわちケインズは、手紙の対象となる

---

(9) *Economic Journal* におけるこのケインズの手紙は、おそらく彼の膨大な著作物の中の最初のものであり、彼が1909年に母校ケンブリッジ大学のフェロー(特別研究員)として金融論を担当し、また *Economic Journal* の編集委員であった時に執筆

論文は理論的には誤っており、歴史的な記述にのみ価値があるというのである。書評の冒頭から、何の遠慮もなく単刀直入に切り込むケインズの一言には、(筆者だけかもしれないが) かなり高飛車な印象を受ける。

ケインズは、まずイネスの次のような主張を取り上げる。イネスは以下のように述べている。「歴史の全領域を通じて、通常、“計算貨幣”と呼ばれる商業的貨幣単位に対応する価値の金属本位制 (metallic standard) が存在するとの証拠はないばかりか、鑄貨の価値ないし金属の重量に依存する貨幣単位もなかったという圧倒的な証拠が存在する。近代の時代までは、貨幣単位と金属との間のどのような固定的な関係はまったくなかったし、実際、価値の金属本位制といったようなものは存在しなかった」(Innes [1913] p. 24)。「鑄貨は何ら安定した価値を持っていなかった」(*Ibid.*, p. 34)。「鑄貨鑄造の変化は物価に影響を及ぼさなかった。すなわち鑄貨は商業に何ら重要な役割を果たさなかった」(*Ibid.*)。「貴金属は価値の標準とはなり得なかったし、交換手段ともなり得なかったのは明らかである」(*Ibid.*)。

上のようなイネスの見解についてケインズはこう指摘する。「それについて記録が残っている計算貨幣というのは、ほとんどの場合、慣習的な単位であり、習慣あるいは国家の行動に関するそれらの価値に依存するもので、金や銀に対してそれらを安定させようとする時折の試みにも関わらず、それらの価値は変動的である」(Keynes [1914] p. 420)。

さらにケインズはイネスの次のような記述を引用する。「鑄貨が何世紀にもわたって何ら安定した価値を持たず、金あるいは銀の鑄貨が存在しない時代があり、さまざまな鑄貨の合金の基本金属の鑄貨だけが物価に影響せず、鑄貨は商業にどんな重要な役割も果たさず、貨幣単位が鑄貨とまったく別個

---

されたものであり、わずか2ページほどの書評である。ケインズ31歳の時の著作である(彼はこの書評執筆の翌年1915年に同誌の編集長に就任すると同時に、英国大蔵省の勤務となった)。

に、金および銀の価格は貨幣単位から絶えず変動し、貴金属は価値の標準とはなり得なかったし、それらは交換手段ともなり得なかった」(Innes [1913] p. 34)。「私が見知っている限り、債務者がその負債を金や銀、あるいは何らかの他の商品で支払うよう強制する法律は存在しないし、これまでも決して存在しなかった」(*Ibid.*, p. 37)。これについてケインズはこうコメントする。「イネス氏によれば、古代ギリシャおよびローマの鑄貨は、貴金属で構成されているけれども、規模や重量および品質において異常なほど可変的であり、貨幣単位の価値は鑄貨に含まれる高価な金属の量に依存するとは到底考えられない。それゆえ鑄貨はすべて名目鑄貨 (token coins) であり、貨幣としての交換価値は、その内在価値とはさまざまな程度に異なっている」(Keynes [1914] p. 420)。ケインズは一応イネスの見解を支持するのであるが、以下のように付け加えている。「こうしたイネス氏が歴史的研究によって確立しようと努める立場は、権威となる文献をまったく参照していないことによって、その価値は不運にもずっと減じられる」(*Ibid.*)。そしてケインズは、イネスの歴史的な研究の最初の事例として、次のような古代ギリシャやローマの鑄貨を取り上げる。「イネス氏によれば、古代ギリシャやローマの鑄貨は、貴金属から成っているけれども、大きさ、重量および品質においてあまりにも可変的であるので、貨幣単位の価値が鑄貨の貴金属の量に依存したとはほとんど考えられない。それゆえ、鑄貨はすべて名目鑄貨 (token coins) であり、貨幣としての交換価値は、その内在価値とさまざまな程度において異なっていた」(*Ibid.*)。つまり、イネスは古代ギリシャやローマの貨幣 (鑄貨) が、実際は貨幣の内在価値よりも名目価値によって決定されていたというのである。

ケインズが指摘する第2の特徴は、イネスが貨幣よりも信用を重視していることである。彼はイネスの次のような記述を引用する。「商業との関連でよくある誤謬の一つは、近代では信用と呼ばれる貨幣節約的な工夫が導入さ



れ、そしてこの工夫が知られる前には、すべての買い物は現金、言葉を換えれば鑄貨で支払われてきた」(Innes [1913] p. 33)。「しかし注意深い調査は、まったく逆が妥当することを示している。古代には鑄貨は商業において、今日よりもずっと小さな役割しか果たさなかった。実際、鑄貨の量は非常に少なかったので、それらは少額の支払いをする目的のためにさまざまな種類の代用貨幣 (token) を定期的に用いる王室の家計や建物の必要を満足させることさえなかった」(*Ibid.*, 傍点は引用者)。ケインズは、この引用についてこう指摘する。「[これは] 単純でよくある誤りである。信用の使用は、現金の使用よりずっと古いと彼は考える。彼が、これを支持するのに挙げる非常に遠く離れた時代からの事例は確かに興味深い」(Keynes [1914] p. 421)。

ケインズは書評の最後に次のような結論を述べている。「この論文のイネス氏の展開は疑いなく興味深い。……彼が納得させようとする主な歴史的結論は大いに根拠があると私は考えているが、[それは] 19世紀半ばの“健全通貨” ドグマに過度に影響を受けた論者によって不当にも無視されてきた。内在価値のある貨幣のみが“健全である”と考えられたのみならず、通貨の歴史においては、内在価値のある貨幣は古代の原始的な理想を示すものでありとしばしば想定されてきた。イネス氏は、そのような歴史はまったくの神話であることを効果的に示したのである」(Keynes [1914] p. 21)。ようやく書評の最後になってケインズはイネスの論文を評価するのである。最初は手厳しくけなして最後は誉め上げるケインズの手腕は見事としか言いようがない。

ところで、ケインズの書評には無視できない一つの大きな問題があるように筆者には思われる。それは、ケインズがイネスの指摘する「アダム・スミスの誤謬」(Innes [1913] p. 23) について、まったく無視していることである。その意図は分からない。イネスが指摘するような誤謬ではないと思ったのかもしれないし、書評としての字数の制約による可能性もある。しかし、

この点は重要であるので少し詳しく論じることにしたい。

イネスは次のように述べている。「金属の使用を節約し、その一定の輸送を防ぐために、近年では“信用”と呼ばれる仕組みが成長してきた。個々の取引ごとにある一定量の重量の金属を手渡しする代りに、好ましい環境のもとでは、金属それ自体と同じ価値を持つ“約束”が与えられる。信用は金の代替物と呼ばれる」(Ibid., p. 22)。またイネスは次のようにいう。「商業および貨幣学の歴史の領域における近代の研究、とりわけバビロニア(Babylonia)における最近の発見によって、以前の経済学者には利用できなかった大量の証拠が明るみに出された。そしてその大量の証拠において明確に述べられているのは、これらの理論のどれ一つも厳密な歴史的証拠の基盤に立脚していないということである。事実、それらは誤っている」(Ibid., p. 23)。

イネスは「厳密な歴史的証拠の基盤に立脚していない」理論として、アダム・スミスの分業論の一節を取り上げる。スミスの『国富論』には次のような記述がある。「[物々交換の不便を避けるために] 世事にたけた人は、自分自身の勤労の特定の生産物の他に、ほとんどの人が彼らの勤労の生産物と交換するのを拒否しないだろうと考えられるような、何らか特定の商品の一定量を、いつも手元に持っているというやりかたである」(Smith [1789] 邦訳『国富論 I』40ページ)。これに続いて、スミスは次のような具体的ないくつかの事例を挙げている。「社会の未開時代には家畜が交易の共通の用具であったといわれている。家畜はそのような用具としては大変不便なものだったが、それでも昔は、物の価値が、それと交換される家畜の頭数にしたがって示された場合が多い。……ニューファウンドランドでは干鱈<sup>ひげ</sup>が、ヴァージニアではタバコが……共通の用具だといわれている。私の聞くところでは、今日スコットランドのある村では、職人が貨幣の代わりに釘をもってパン屋や居酒屋に出かけることも珍しくないという話である」(Ibid., 邦訳41ページ)

ジ)。スミス分業論の中によく知られた一節である。しかし問題は、スミスが挙げるような事例が果たして本当に歴史的な事実として実在したのかどうかという点である。

これについて、イネスは以上のスミスの記述に即して痛烈な批判を展開する。まず、こう論じている。「スコットランドの村では、商人が釘の製造業者にその材料と食物を販売し、彼らからその負債に相当する価値を差し引いて釘の完成品を購入したのである」(Innes [1913] p. 23)。「貨幣の使用は、われわれがそうであるように、ニューファウンドランド島の海岸や堤防にしばしば出かける漁師たちによく知られていたが、金属通貨は、それが欲しがられないという理由だけで用いられなかった。ニューファウンドランド漁業の初期には、ヨーロッパ人の定住民はいなかった。漁師たちは、漁獲シーズンにのみそこに出て行き、漁師以外の者といえ、干し魚を買い付け、漁師たちに日用品を売る商人たちであった。漁師たちは、その獲物を商人たちに、ポンド、シリング、ペンスでの市場価格で売り、その代金として帳簿での信用を受け取り [すなわち、売掛金として帳簿に記入し]、それをを用いて日用品を購入した。商人たちの収支の差額は、イングランドやフランスにおいて為替手形 (drafts) によって支払われた」(Ibid.)。「少し考えてみると、主要な商品を貨幣として使用することはできないことが分かる。というのは、仮説に従えば (*ex hypothesi*)、交換手段は、共同体のすべての成員によって等しく受容され得るものだからである。したがって、漁師が鱈で彼らの日用品に対する支払いをすれば、商人も同じく鱈のための支払いを鱈でもって行わなければならないだろう。こんな馬鹿げたことがあるだろうか」(Ibid.)。「これら2つの事例で、アダム・スミスが発見したと信じる明白な通貨は、実際は、ただ単に信用 (credit) を見つけたにすぎなかったのである」(Ibid.)。

イネスは、第2論文で、もう一つのスミスの誤謬を指摘し、こう述べている。「アダム・スミスは、よくある思い違いではなく、人類の普遍的な経験

から学ぶ現実の生活との矛盾に陥った。もし貨幣が不可解な“購買力”を意味する通常の言葉の意味での富でなければ、人々の商業全体は一つの誤謬に基づいている。富ではなく“富を流通させる歯車”であるというスミスの貨幣の定義は、貨幣を得ようと努力し、貨幣を蓄積しようとする、われわれの周りで見られる事実を説明しない。もし貨幣が単に歯車であるならば、なぜわれわれは歯車を蓄積しようとするのだろうか。……その [歯車と貨幣の類似は間違っている] (Innes [1914] pp, 52-53)<sup>(10)</sup>。今から100年以上も前に、イネスはスミスの誤謬を痛烈に批判するのである。

カリムサディは、イネスの業績について次のように評価する。「イネスは物々交換から貨幣交換への発展という既知の典型的な記述を否定する。この記述は、経済発展の初期段階では貨幣は存在しなかったと述べている。経済取引は物々交換システムに基づいて行われたのである。経済発展の後の段階では、物々交換は、財が他の財と間接的に交換されるより進んだ経済システムに道を譲った。……それが、[貨幣という] 一般的に受容される交換手段が、物々交換の非効率を克服して存在するようになった理由である。イネスは、この単純な貨幣の発展過程についての記述に異議を唱え、『これらの理論は何ら信頼できる歴史的証拠に基づいていない。実際それらは間違っている』というのである」(Karimzadi [2013] p. 39)。

一方、インガム (G. Ingham) はさらに進んで、イネスが的確に指摘したように、「アダム・スミスの誤謬」に賛意を表してこう述べている。「スミス

---

(10) イネスの指摘する“富を流通させる歯車”というスミスの一語は、『国富論 I』の次のような記述に依拠すると思われる。「個人または社会の固定資本を構成する機械や事業上の用具などは、個人の場合も社会の場合も、総収入の一部でもなければ純収入の一部でもない。これと同じく、貨幣は、それ自体は、社会の収入のいかなる部分でもない。しかも、この貨幣を媒介として、社会の全収入がさまざまな成員の間に規則的に分配されるのである。この流通の大車輪 (the great wheel of circulation) は、それを媒介として流通する財貨とはまったく別のものである」(Smith [1789] 邦訳442ページ)。

が議論したような、18世紀の、スコットランドの釘やニューファウンドランドの干し鱈といった交換手段は、原始‘貨幣’の実例ではない。それらはむしろ、抽象的な計算貨幣と判断される負債の支払いであった。……ミッチェル・イネスがほとんど一世紀も前に説明したように、主要産物（干し鱈）が貨幣であると結論するのは馬鹿げている」（Ingham [2004] p. 34, 傍点は原文ではイタリック）。

こうしてみると、ケインズは「スミスの誤謬」を的確に指摘するイネスの重要な指摘をまったく見抜けなかったか、あるいは彼自身の考え方とは相容れなかったと思わざるを得ない。ケインズは『貨幣論 I』において、「人々が計算貨幣を採用した瞬間から、貨幣の時代が物々交換の時代の後を引き継ぐに至ったのである」（Keynes [(1930) 1971] 邦訳5ページ, 傍点は引用者）と述べている。この記述が明示するように、ケインズは物々交換の時代を経て貨幣の時代が到来したという伝統的な考え方を踏襲しているのである。こうしたイネスの考え方とは大きく異なるケインズの見解が、書評において彼を沈黙させたのではないだろうか。なぜ「スミスの誤謬」の問題は重要なのか、なぜイネスの見解は重要で新鮮なのか。それは、イネスが“信用は貨幣に先行する”という、当時としては奇抜とも思われる極めてユニークな見解を最初に提起したからにほかならないと思われる。

この点に関連して、グレーバー（David Graeber）は次のように述べている。「スミスの議論が詳細な検討に値するのは、私の考えでは、それが経済学という学問の大いなる創造神話だからである」（Graeber [2011] 邦訳39ページ, 傍点は引用者）。「驚くべきことに、アダム・スミスが挙げた魚や釘やタバコを貨幣として使用する事例においてさえ同じことが起こっていた。『国富論』の登場以後の時代に、学者たちはこれらの事例のほとんどすべてを調べ上げ、事例のすべてにおいて、人々が貨幣の使用に十分に親しんでいること、そして現実に貨幣を使用している——計算単位として——ことを発見し

たのである。ニューファウンドランド島で貨幣として使用されていると考えられていた干し鱈の例をとってみよう。ほぼ一世紀前にイギリスの外交官だったA・ミッチェル・イネスが指摘したように、スミスの指摘していることは、実際には単純な信用協定によって作られた幻想だったのだ」(Ibid., 58ページ)。

イネスは、“What is Money?”というわずか一編の論文で、こうした経済学の創造神話を破壊したという意味で大きな貢献をしたと言える。彼が経済学の伝統的な考え方を一蹴し、それを烏有に帰し、新しい地平を切り開いたといっても差し支えあるまい。イネスというまったく無名の研究者が「経済学の父」に対して真っ向から挑戦した事実は特筆に値する。

トマス・クーン(Thomas Kuhn)は著書『科学革命の構造』において、科学の進歩のパターンを見ると、ある時代に定着した古いパラダイムは、いつかは新しいパラダイムに革命的に取って代わられると述べている。ここでパラダイムとは、天動説や地動説がそうであるように、その時代の多くの人々に広く受け入れられ、科学上の諸問題を取り扱う前提となる共通の思考の枠組みのことである。イネスの見解は、経済学上の一つのパラダイムの変換ないしはパラダイム・シフトを意味すると言ってもそれほど過言ではないように思われる。ただクーンは、「社会科学の分野では、パラダイムというものが、果たしてできているかどうかさえまだ問題である。研究者の意見一致をみるに至る道は、きわめて険しいことを歴史は示している」(Kuhn [1962] 邦訳18ページ)と述べていることを付け加えておこう。

### III ケインズの「古代通貨論」

前節で紹介したケインズのイネス論文の書評について、レイ＝ベルは次のように述べている。「イネスによるこれらの貢献が、ケインズ自身の1920—1926年間のほとんどの研究を古代貨幣への研究に導いたことを推測するのは

興味深い。……しかしながら、そのアイデアのいくつかはイネスの書評の数年後〔正確には17年後—引用者〕に出版された『貨幣論』に表れている〕(Wray and Bell [2004] p. 12) と指摘している。*Economic Journal*でのケインズの書評が彼の古代貨幣の研究、すなわちこの節で検討する「古代通貨論」(Ancient Currencies)の執筆の動機となり、それがさらにケインズの主著の一つ『貨幣論』の執筆を促したというのである。

ケインズの「古代通貨論」は、ケインズ全集全28巻の最後の巻(第28巻)に掲載されたもので、彼の数多くの著作の中ではほとんど注目されず、読まれることのなかった一編ではあるまいか。しかしこれは、貨幣の起源や貨幣の歴史について数多くの示唆を与えてくれる貴重な小編であることは確かであるように思われる。ケインズは次のように述べている。「記録された歴史のほとんど全期間を通じて、貨幣価値の低下は、簡単な議論に値する。それは、貨幣が造られる金属の大量の増加、ないしは貨幣単位の金属の含有量の減少による失敗という2つの方法によってもたらされた。前者を貨幣価値の下落(Depreciation)、後者を貨幣価値の切り下げ(Debasement)と呼ぶのが便利である。もし歴史の推移と本質が前者を生じさせないならば、人間は一般に後者を頼みとするものである」(Keynes [(1920-1926) 1982] p. 226)。ケインズはこの記述に続いてこう指摘する。「最初に貨幣の使用が物々交換に取って代わるとき、鑄貨は金塊にほかならず、それに捺された刻印が品質と数量を証明するものの、その金塊の価値を除いては流通しない。この初歩的な段階では、貨幣価値切り下げという方法は利用できない。契約の発達につれて計算貨幣(money of account)の概念が現れ、国家によって発行された鑄貨が法貨(legal tender)の性格を獲得し、この計算貨幣で測られた債務の法的履行を経験する。われわれが理解する意味で、貨幣が人類の制度に登場するようになるのはこの段階である」(*Ibid.*, p. 226)」。ケインズはこうして貨幣制度が実現する初期の段階として、①物々交換に代わる貨幣の生成、

②最初の貨幣としての金属貨幣の登場，③契約の発達による「計算貨幣」の出現，④国家の関与による「法貨」および債務の法的履行の実現を指摘するのである。

以上からも明らかのように，ケインズは「計算貨幣」をきわめて重視する。すぐ後にも触れるように，この計算貨幣を重視する立場は彼の『貨幣論』にも踏襲される。ケインズは，古代バビロニアや古代ローマにおける重量標準は，小麦や大麦の穀粒が重要な役割を果たしていたという。そのことは，次のような記述からも窺われる。「西洋文明の基本的な重量標準は，その最も初期から測定規準システム（metric system）の導入に至るまで決して変更されなかった。これらの事柄は，シュメール人やエジプト人のアイデアとは異なる最初の真の革命であった。古代バビロニアにおける中世世界および地中海沿岸や欧州のあらゆる重量標準は，その単位として小麦か大麦の穀粒（grain）に基礎を置くものであった」（*Ibid.*, p. 239）。そしてケインズは，古代バビロニアでは重量単位であるタレント（talent），ミナ（mina），シェケル（shekel），グレイン（grain）などが貨幣単位としても用いられるようになり，また銀建ての計算貨幣の登場によって，さまざまな商品，債務，資産などがその計算貨幣単位で表示することが可能となったというのである（*Ibid.* pp. 244-250）。確かにケインズが指摘するとおり，銀建ての貨幣単位<sup>(11)</sup>については，有名なハンムラビ法典（Code of Hammurabi）にも頻出する。

---

(11) ハンムラビ法典は，古代バビロニアを統治したハンムラビ王（B.C. 1792-1750）が発布した法典であり，アッカド（Akkad）語が使用され，楔形文字で記されている。この法典は，当時の犯罪，裁判，兵士，社会構成，農業，商業，結婚，家族，遺産相続などのさまざまな事例について記述している。具体的には，犯罪に対する刑罰を定めたり（ただし，あらかじめ犯罪に対応する刑罰の限界を定める刑法法定主義の立場をとり，刑法学においては近代刑法への歴史的に重要な規定とされている）。財産の保証や奴隷階級に対して一定の権利を認め，条件によっては奴隷解放を認める条文も存在し，女性の側から離婚する権利や夫と離婚した寡婦を擁護する条文も含まれるなど女性の権利を保護する条文も含まれている。このハンムラビ法典を通じて，ハンムラビ王統治下の社会情勢を垣間見ることができると非常に貴



ここではハンムラビ法典から、銀建ての貨幣単位について述べた2つの例を引用しよう。「もし人が逃亡中の男奴隷あるいは女奴隷を荒野で捕え、その所有者まで連れてきたなら、奴隷の所有者は銀2シェケル（約16.7グラム）を彼に与えなければならない」（『ハンムラビ「法典」』邦訳13ページ）。「もし人が（別の）人の果樹園の木を、その果樹園の所有者の知らない間に切ったなら、彼は銀2分の1マナ（約250グラム）を支払わなければならない」（同、22ページ）。重量標準についてのケインズの説明はこの程度にごく簡単にとどめ、以下では彼の貨幣の起源説に焦点を絞って検討することにしよう。

「古代通貨論」における貨幣起源論は、上に垣間見たケインズの貨幣単位・重量単位についての冗長な記述とは対照的に、豊かな内容が凝縮された形で提示されている印象を受ける。ケインズはまず、貨幣の特性として次の4つを指摘する。①宗教的賦課金、罰金や賞金のような慣習的価値の推定を表すために規則的に用いられる。②それによって、貸し出しおよび契約の条件を表すために用いられる。③それによって価格が表示される。④慣習的な交換手段として用いられる（*Ibid.*, p. 253）。このうち、最初の3つが「計算貨幣」に妥当する条件であり、「慣習的な交換手段」が現実の貨幣として用いられる。ケインズによれば、「社会的かつ経済的目的にとって最も重要であるのは計算貨幣である。というのは、計算貨幣は契約や慣習的な義務の主題となるからである」（*Ibid.*）。

こうしたケインズの主張は、さまざまな点で『貨幣論』にも織り込められ、より詳細な説明がなされている。ケインズが計算貨幣としての貨幣の役割を強調したことはよく知られている。『貨幣論 I』第1章の冒頭において、「計算貨幣、すなわちそれによって債務や一般的購買力を表示するものは、貨幣理論の本源的概念である」（Keynes [(1930) 1971] vol. 1, 邦訳3ページ、傍

---

重なる資料とされている。詳しくは、『ハンムラビ法典』（中田一郎訳2002年第2版）および Klengel [1976]（邦訳1980年）とくに第V章を参照されたい。

点は引用者)と定義したうえで次のように述べている。「貨幣契約それ自体は、債務契約および価格契約がその引き渡しによって履行され、貯蓄された一般的購買力がその形をとって保持されるものであって、その特質はその計算貨幣との関連に由来するのであるが、それは債務と価格とが、まず第1に、計算貨幣によって評されていないからである」(Ibid., 傍点は原文ではイタリック)。「貨幣と計算貨幣との区別は、計算貨幣は記述あるいは称号であり、貨幣はその記述に照応する物であるといえ、おそらく明らかにし得るであろう。……貨幣契約の一つの特殊な性質は、国家または社会が、単に引渡しを強制するだけでなく、計算貨幣をもって締結されている契約の合法的あるいは慣習的な履行として引き渡されなければならないものは何かということをも決定する点にある。したがって国家は、まず第一に、契約に含まれている名称もしくは記述に照応する物の支払いを強制する法の権威として現れる。しかし国家が、これに加えていかなる物がその名称に照応するかを定め、それを布告し、そしてその布告を時々変更する権利を要求するとき……国家は二役を演じることになる。この権利は、すべて近代国家が要求しており、そして少なくとも約4000年の間そのように要求し続けてきた。クナップの表券主義 (chartalism) ——貨幣はとくに国家の創造物であるという学説——が完全に実現されるのは、貨幣の発展がこの段階に到達したときである」(Ibid., 邦訳 4-5 ページ, 傍点は原文ではイタリック)。ケインズは、少なくとも約4000年もの間、国家は契約に含まれる名称もしくは記述に照応する物の支払いを強制する権利と、どのような物がその名称に照応するかを定め、それを布告し、その布告を変更する権利を合わせ持ち、必要に応じて、その権利を実行するというのである。

ケインズはさらにこう付言する。「人々が計算貨幣を採用した瞬間から、貨幣の時代が物々交換の時代の後を引き継ぐに至ったのである。そして表券主義的貨幣、すなわち国家貨幣の時代は、国家が、一般に行われている計算

貨幣に対して、いかなるものを貨幣としてこれに照応させるかを布告する権利を要求したときに……達せられた。今日すべての文明社会の貨幣は、議論の余地なく表券主義的である」(Ibid., 邦訳 4-5 ページ, 傍点は原文ではイタリック)。この一文が示すように、ケインズが物々交換の時代を経て貨幣の時代が到来したという従来の“標準的な見解”を踏襲していることは明らかである。この点で前節で指摘したように、物々交換の存在を否定し、「信用が貨幣に先立つ」と明言したイネスとは根本的に異なっている。

ケインズは、「貨幣は文明にとって不可欠な他のいくつかの要素と同様に、われわれが数年前までそのように教えられて信じていたよりも、はるかに古い制度である」(Ibid., 邦訳14ページ)と述べ、近代の銀行による貨幣の「創造」の重要性を主張する。ケインズによれば、「銀行は銀行自身に対する貨幣引渡し請求権、すなわちわれわれが以下預金と呼ぶものを、2つの方法で創造する。まず第一に、銀行は現金、あるいはある銀行(他行あるいは自行)にある預金の譲渡を委任する指図証券(すなわち小切手)の形で受け取った金額に対して、個々の預金者の名義で預金を創造する」(Ibid., 邦訳24ページ)。そして第2の方法として、ケインズはこう述べている。「銀行は自ら資産を購入、すなわちその投資を追加し、少なくとも当初は、自己に対する請求権を設定することによってその支払いをすることができる。あるいは銀行は、借主の後日返済するという約束と引き換えに、借主のために自己に対する請求権を創造する、すなわち貸し付けあるいは前貸しをすることもできる。……この2つの[方法の]間には、銀行に対して与えられる預金創造の誘因の性質以外には何の相違もない」(Ibid.)と明言する。すなわち、ケインズは銀行による内生的な貨幣(預金)供給ルートを明らかにするのである。<sup>(12)</sup>こ

---

(12) ただしケインズ『一般理論』における流動性選好説では、貨幣供給量が外生的に与えられている点で、『貨幣論I』とは大きく異なっている。もちろん、ホートレーが繰り返し指摘する「貸し出しが貨幣を生む」(the lending generates money)

うしてケインズは計算貨幣および貨幣の創造について詳述するのである。

しかし意地悪な見方をすれば、計算貨幣についても、貨幣の創造についても、これらはケインズ自身のオリジナルな貢献ではなく、ケインズに先立って、イネスやホートレーによって重視されているのである。例えばイネスは第1論文において貨幣単位 (monetary denomination) としての計算貨幣について繰り返し言及している (Innes [1913] p. 24, p. 25, p. 26)。またケインズはホートレーの『通貨と信用』(1919)の書評において、これ(『通貨と信用』)は、長年にわたって現れた貨幣理論に関する最も独創的で意味深い書物の一つである」(Keynes [1920] p. 362)と述べ、「それは基本的な考え方を盛り込んだ書物ではあるが、私の判断では、少なくともイギリスにおいて、将来の貨幣理論の展開に重要な影響を及ぼすだろう」(Ibid.)とも述べ、きわめて高い評価を下している。この書評には「計算貨幣」という用語が頻出する。一方、銀行の貨幣の創造については、ホートレーはケインズに先立って、しかもケインズ以上に詳細な分析を加えている。

ただし、預金供給の最大の源泉が銀行貸出にあるとの見解は、ホートレーに先立って、I. フィッシャーによっても指摘されている。フィッシャーは次のようにいう。「これらの借り入れはほとんど銀行からの短期の貸し出しの形態をとる。そしてわれわれがすでにみたように、短期の貸し出しは預金を生み出す。よく知られているように、貸し出しと預金の対応は驚くほど正確である」(Fisher [1911] p. 59)。だが、貸し出しと預金の不即不離の関係にあり、前者が後者を創り出すことを最初に指摘したのは、ジョン・スチュアート・ミルではなかったかと筆者は確信している。ミルは『経済学原理』においてこう述べている。「貸し出しと貨幣の間には、一つの真の関係が存在する。この関係を認識することは、重要なことである。貸付資本 (loanable

---

という貨幣供給の内生性の主張とは無縁である。これについては、古川 [2012] 第2章43ページ、第7章194-195ページ、248-249ページ注32を参照されたい。

capital) はその全部が貨幣の形態をとっている」(Mill [1878] 邦訳389ページ)と述べ、さらに次のように指摘する。「イギリスにおいては、また多くの商業諸国においては、普通に使用されている紙幣は銀行によって供給される通貨であるから、金銀の購入に使用される部分を除けば、そのすべてが貸し出しの方法によって発行される」(Ibid., 邦訳391ページ)。

やや話が脱線したが、ケインズは、「古代通貨論」において貨幣の起源およびその歴史について自説を展開する。彼は次のように述べている。「歴史学者の中には、ある特定の捺印された貨幣や鋳貨は BC 7, 6 世紀のギリシャにおける経済発展と、長らくバビロニアの影響のもとにあった地域の経済発展との対照を過小評価している人がいる、と私は思う。というのは、ある特定の種類の刻印された、あるいは鋳造された貨幣は BC 6 ないし 7 世紀の小アジア (Asian Minor) で初めて鋳造されたのであり、貨幣経済の諸特性はギリシャよりそれほど遠く遡らないと考えられてきたからである。しかしながら、貨幣に刻印するという工夫は、それほど重要な発明ではない。バビロニアの慣行における最初の重要な革新は本質的に近代的な貨幣、すなわち代表貨幣 (representative money) の発明である」(Keynes [(1920-1926) 1982] p. 254)<sup>(13)</sup>。

---

(13) ケインズのいう「代表貨幣」とは、「古代通貨論」には定義されていないが、『貨幣論 1』には定義されている。ケインズはこう述べている。「銀行貨幣はもはや前述の定義 [計算貨幣で表示される私的な債務の承認——引用者] にあるように私的な債務ではなく、国家の負う債務を表すものとなり、そして次に国家はその表券主義的特権を行使する特定の種類の銀行貨幣が本来の貨幣——本来の貨幣の一種で、われわれが代表貨幣と呼んで差し支えないもの——に転化させられる。しかしながら、単に債務であるにすぎなかったものが本来の貨幣になったときには、それはその性質を変えてしまっており、そしてもはや債務とみなされるべきではないのであって、その理由は、それ自身以外の他の何かあるものをもって支払いを強制されるということが、債務の基本的性質であるからである」(Keynes [(1930) 1971] 邦訳 6 ページ、傍点は引用者)。このようにケインズは代表貨幣についてもって回った定義を与えているが、要するに、法貨としての銀行券と銀行預金の合計であるとみなして差し支えない。

さらにケインズはこう付け加える。「真の貨幣の導入を構成する貨幣鑄造とはほど遠く、貨幣経済を創設し、その発展のための特殊な才能を発揮し、貨幣鑄造の不正確と不測の困難にとくに疑念を抱いていた人々は、いやいやながら〔金銀の〕延べ棒 (bullion) の簡単さと単純さを選好した。多くの著述家は、鑄貨が存在しなかったところでは物々交換が行われていたと推論するけれども、それはまったく真実に合致するにはほど遠い (far from accordance with truth)。他方、この節のはじめに要約した4つの重要な目的のそれぞれに対応する、貨幣としての貴金属の利用が、すでにバビロニア領域内の至る所で少なくとも2000年以上も普及していた」(Ibid., p. 255, 傍点は引用者)。「時間の要素を伴う貸し出しや契約を表示する計算貨幣の導入が、真に未開社会の経済状態を変化させた。そして、この意味での貨幣は、ソロン (Solon) の時代以前に、高度に発達した形ですでにバビロニアに存在したのである」(Ibid.)<sup>(14)</sup>。こうしてケインズは「古代通貨論」において、「鑄貨が存在しなかったところでは物々交換が行われていた」という専門家の見解を頭から否定し、古代バビロニアでは貴金属が貨幣として幅広く用いられ、しかも「計算貨幣」の導入は、貸し出しや契約といった「信用」の活用によって未開社会の経済状態を大きく変容させたと主張するのである。以下ではケ

---

(14) 「ソロンの時代」とは、古代アテナイの政治家、立法者および詩人として知られるソロン (紀元前639年頃—紀元前559年頃) が活躍した時代であり、彼は政治、経済 (とくに貨幣制度)、道徳などの幅広い分野で大改革を行ったとされている。詳しくは、Bintliff, J. [2006] および Ehrenberg [1973] を参照されたい。なおケインズは、ソロンについて次のように述べている。「この理由のために、貨幣の歴史はソロンから始まる。彼は新しい本位硬貨を既存の計算貨幣に適合させるべく法律の強制力を用いた歴史が記録する最初の政治家である」(Keynes [(1920-1926) 1982] p. 226)。ケインズは『貨幣論I』においてもソロンの改革に言及し、こう述べている。「紀元前6世紀のアテネの通貨に関するソロンの改革は、表券主義的大権の行使であって、それは鑄造貨幣の存在と同時代ではあったが、しかしいかなる点でも、それに依存するものではなかった。それはまさに標準の変更であった」(Keynes [(1930) 1971] 邦訳14ページ)。

インズが「古代通貨論」の主たる対象とした古代バビロニアの経済や貨幣・信用制度について、いくつかの文献によって補足しておきたい。

古代バビロニアの歴史を取り扱った文献は数多い。ホーマー (Sidney Homer) は古代バビロニアの信用制度を中心に次のように論じている。「信用は時々近代的工夫あるいは近代的悪習とさえ考えられてきた。われわれの世紀にはいくらかの新しい信用形態が発展し、最近数十年間に信用額の成長を反映する諸統計が印象的であることは本当である。しかし金融の歴史を一瞥するだけで、珍奇の概念は追い払われるだろう。信用は、古代および中世の時代に一般的に利用されてきた。信用は長い間、産業、銀行業および硬貨鑄造にさえ先行し、それはおそらく、貨幣の原始的な形態よりも先行したであろう。利子付きの貸し出し (loans at interest) は、新石器時代の農民が彼の従弟に種子の貸し出しをし、収穫期により多くの返済を期待したときに始まったといわれる。それはともかく、いくつかの大文明の記録された法律の歴史は、精巧な信用の規制をもって始まった」(Homer [1963] pp. 3-4)<sup>(15)</sup>。「有史時代には、信用は2千年以上にわたって貨幣の鑄造に先行していた。鑄造は紀元前最初の千年紀からと推定されているが、およそ紀元前3千年のシュメールの古文書は、容量による穀物の貸し出しおよび重量による金属の

---

(15) ホーマーは、「いくつかの大文明の記録された法律の歴史は、精巧な信用の規制とともに始まった」という事例として、次の3つを挙げている。①紀元前1800年頃の古代バビロニア第一王朝のハンムラビ王が国民に最初の法典を提示し、この法典によって本質的には穀類 (grain) の貸し出しの返済に適用する最高利率を年利  $33\cdot1/3\%$  に規制するなど、債務者と債権者の関係を規制した。②紀元前600年頃の古代ギリシャの法制史は、ソロン (Solon) の施行した法律で始まった。この思い切ったソロンの改革は、過剰な債務と、債務による広範な奴隷の存在に起因するアテネの経済的危機によって引き起こされた。③古代ローマの法律の歴史も、信用を規制する法体系の導入によって始まった。これもまたギリシャと同様、過剰債務によって特徴づけられる危機に起因する。紀元前450年頃から続いている信用規制では、貸出利率は年利  $8\cdot1/3\%$  に制限され、その法定利率より高い金利はその4倍のペナルティを課せられた、などである (Homer [1963] p. 4)。

貸し付けに基づく信用の利用が規則的な利用を明らかにしている。しばしばこれらは、利子を伴っていた。有史以前には、共通の価値尺度や交換手段の発展以前にさえ、おそらく信用は存在していたであろう。どんな交換手段の痕跡や価値の標準さえ発見されえない社会にも多くの民俗学的な信用の事例がある。信用はまさに経済活動の最初期の局面から存在し、物々交換自体の発展以前にさえ存在したのである」(Ibid. p. 17, 傍点は引用者)。

ホーマーは、有史以来の人類の歴史を振り返ると、信用には「贈り物」と「利子なしの貸し出し」と「利子付きの貸し出し」の3つがあるとして次のように指摘する。「長続きしたもう一つの初期の区別は、例えば動物、道具、農場といった、それ自体が返済されなければならない確実な対象物と、それ自体は返済される必要はないが、本来は返済されなければならない商品(種子、貨幣あるいは食物)の貸し出し、すなわち元の商品がもはや存在しないか、同様のものと区別できない商品との区別である。本来返済可能な貸し出しのタイプは、品質や尺度に関する標準を必要とした。実際、そのような貸し出しは原始的な尺度および貨幣的標準の発展に導いた。交換手段としての穀物の利用は古代オリエントに共通のものであり、それは最近の歴史時代まで用いられた。その後のより洗練された発展は、あらゆる返済に対して共通の標準、すなわち貨幣を創造することになった。穀物、土地、動物、あるいは貨幣それ自体による貸し出しは、利子付きか利子なしの如何にかかわらず、すべて貨幣によって返済されるようになった。土地の貸し出し、あるいは土地によって担保された貸し出しは、有史以前の信用の形態である」(Ibid., pp. 18-19)。

またホーマーはこう指摘する。「払い戻しできる貸し出しのタイプには、品質および尺度の標準を必要とした。実際、そのような貸し出しは、原始的な尺度や貨幣的標準の発展を導いたのであろう。交換手段としての穀物の利用は、古代オリエントには共通のものであり、その後の歴史時代まで用いられ



た。その後の高度の発展は、あらゆる返済のための共通の手段、すなわち貨幣の創造を生み出した。穀物、あるいは土地、あるいは動物、あるいは貨幣それ自体の貸し出しは、有利子あるいは無利子の貨幣ですべて返済され得るようになった」(Ibid., p. 19)。

ホーマーは次のようにも述べている。「土地の貸し出し、あるいは土地によって担保された貸し出しは、歴史時代以前に発展した信用の形態である。……元本の返済は利子の返済とは異なった形でなされた。土地それ自体は返却された——いつの時代のほとんどの農夫にとっても苦痛であったものの——。あるいは元本は果実から割賦返済された、あるいは実際、元本は返済されずに、永続的な毎年の支払いの基礎としてとどまった」(Ibid.)。「これは決して原始的な信用形態の完全な一覧ではない。とりわけ、この他では、身代金を提供したり、結婚資金(持参金)を賄ったり、財貨の輸送資金や宗教的寄付金、戦争の資金を調達したりするための貸し出しにも言及されるべきである。こうした歴史を通じて、信用の4つのタイプを区別する基本的な違いがある。それは、(a) 長期の生産的貸出、(b) 短期の運転資金貸出 (c) 非生産的消費貸出、(d) 政府への貸出である」(Ibid.)。

さらにホーマーは説明を加えてこう述べている。「紀元前8000年後に少し遅れる中石器時代、とくに紀元前5000年後の新石器時代(もちろん、時代は推測的なもので場所によって大幅に異なっている)には、資本と信用は重要となり、人類の進歩に対して主要な刺激となった」(Ibid.)。「牛と穀物は利用可能で、消費の必要量を越えた需要には、それらは原始的貨幣の形態を提供した。すなわちそれらは、他の商品との標準的な交換手段として好都合に用いられ得る十分な価値と均一性のある商品となった。それらはまた、有利子で貸し出すこともできた。加えて、それらは評価の基準を提供した。紀元前5000年の早い時期には、中東ではオリーブ、イチジク、ナッツあるいは穀物の種子はおそらく農奴、貧農あるいは召使いに貸し出され、収穫機の増加

した部分は、返済すると期待されたことであろう」(*Ibid.*, p. 20)。以上のホームマーの記述は、微に入り細をうがつ説明であり、古代バビロニアの信用制度の実体とその変化をあぶり出している。

クレンゲル (Horst Klengel) も、古代バビロニアの貨幣・信用制度について詳述している。「古代バビロニア時代の債務関係の文書の中に債務関係のテキストが極めて多数あるのも不思議ではない。例えば貸し出しや債務証書、また特定の種類の購入・交換文書、雇用文書、小作文書などがその類である。……前払い購入とも呼ばれる前者(先物取引)では、商品の引き渡しが進められた前日に約束される代りに、大麦ないし銀を借り受ける。信用取引では、商品が「借り」られて、定められた額の支払いが約束された。特に数多いのは貸し出しであり、何はさておき私たちの関心を引きつける。それは極めて大量の私法文書類をなし、たいていはシュメール語で書かれる一定の書式がある」(Klengel [1976] 邦訳82-83ページ、傍点は引用者)。「[銀(または現物)を債権者から債務者が受け取った。彼は定められた期日に銀(または現物)を返済するであろう]。この書式には折々の条件に応じて、とくに利子の取り決めについて書き加えがなされた」(*Ibid.*, 邦訳83ページ)。

さらにクレンゲルはこう指摘する。「ますます強固に形成されていく信用制度およびそれと統合した高利がもたらした社会的帰結は、さまざまな身分と職業の債務者が大量に発生したことであった。もし債務者が文書に定められている義務を果たせないときには、契約の条項に従って、彼の家、家族のメンバーあるいは奴隷が利子の代わりに債務者に譲り渡された。あるいは債務者は債務拘留ないし債務による隷属に陥り、いったんこの状態にあると債務関係から再び抜け出すことは極めて難しかった。王が発布する徳政令、つまり債務免除を別にすると、ここで助けとなりうるものはとくに保証人の登場であった。人々が他人の債務義務のために保証人となったことを示す多くの証拠が存在する」(*Ibid.*, 87ページ)。「高利貸したちは彼らが活躍したハ

ンムラビ以前の時代の諸条件のもとで非常に広範な活動分野を得た。というのは、信用の供与は欠くことのできないものとなっており、生産を改良したり拡大したりするにも、また他にも一時的に金作の苦しさから抜け出るにも時々利用されたからである。信用制度がこういう積極的な面を持っていたことを過小評価してはならない。もちろんその法外な高利により社会の発展にマイナスの影響を与えたのは事実である。まさに自営の手工業者や小農民生活者がしばしば債務から脱却できずに存在の基盤を失った」(Ibid., 邦訳95ページ<sup>(16)</sup>)。以上のクレンゲルの説明は精妙で、当時のバビロニアの信用取引の実態を彷彿とさせるものがある。

アインチヒ (Paul Einzig) は、その著『原始貨幣』の「バビロニアおよびアッシリアの大麥貨幣と銀貨幣」(第2篇歴史部門)と題する第3章で、ケインズの論じた古代バビロニアの貨幣について明解に説明している。以下にその一節を引用してみよう。

アインチヒはこう説明する。「貨幣は、ナイル河流域よりもチグリス・ユーフラテス河流域においてはるかに発達した。バビロニアは、紀元前三千年紀(the 3rd millennium)に、さまざまな貨幣取引に関する精巧な規定を含む高度に発達した法制度をもっていた」(Einzig [1966] p. 202)。その理由として、「バビロニアやアッシリアにはエジプトよりも商業の自由があった。外国貿易はもっと高度に発達していた。その地理的位置によって、バビロニアは近隣諸国と密接に接触しうる運命にあった。国内取引も後世に受け継がれてきた貴重な文書に示されるように、高度に発達していた。計算単位の利用は、

---

(16) 古代メソポタミアの貨幣の変遷については、Powell [1996] pp. 224-242)も詳しい。パウエルはこの論文で、古代メソポタミアの最も一般的な貨幣は「安価な貨幣」としての大麥 (barley) であり、もっと高価な貨幣としての銀であったという。パウエルによれば、「大麥は、とりわけ他の主要な貨幣が銀であったところでは、安価な地域貨幣 (local money) として機能した。古代の技術は、少額の銀の十分に正確な重量を量ることを許さなかった」(Powell [1966] p. 229) のである。

非常に初期の段階から発達していた。自然経済から貨幣経済への移行は、紀元前三千年紀に発達し、バベル (Babel) 第一王朝 (紀元前2225-1926) の時代までにはほぼ完成していた。穀物と金属の貨幣利用がかなり発達していたのみならず、それは著しく発達した信用システムの進展を導いた。とりわけ、通貨は法貨となり、多くの場合、銀の铸塊 (ingot) がその重量や品質を証明するために——明らかに国家当局によるのではないけれども——現実に刻印されていた」(Ibid., pp. 202-203)。「バビロニアは通貨の複合システム存在の特徴的な事例を提供する。銅、それに続く銀およびその後の段階での金は主な通貨の役割を果たしたが、大麦もまた重要な役割を果たした。シェケル (shekel) が大麦180粒の重さに相当するという事実は、大麦は主要な貨幣単位として銀に先行したことを示しているように思われる」(Ibid., p. 203)。まさに古代バビロニアでは、貴金属のみならず、大麦貨幣 (barley money) が大手を振って貨幣として通用したのである。

## おわりに

第1節で論じたように、貨幣の起源には実にさまざまな見解がある。アリストテレスが最初に提唱したと言われる都市国家 (ポリス) など共同体的社会を構成する人々の「申し合わせ」ないし社会的合意に基づいて創造されたとする人為的貨幣起源説、ジョン・ローに代表されるように、物々交換の困難を克服するために、社会を構成する成員の誰からも受容される交換手段としての貨幣が自然発生的に生じたとする貨幣自生説、「貨幣は法制の創造物」であるとするクナップの貨幣国定説もある。さらには貨幣の起源を賠償、貢物、贈り物、宗教的起源、政治的起源、婚礼の儀式などに求める見解も無視できない。アインチヒは『原始貨幣』という大著において、世界の地域別、時代別に実に多様な貨幣の起源や貨幣の素材が存在すると論じている。一読するだけで驚くに相違ない。

ところで、物々交換に代替して貴金属などの商品貨幣が発展するというのが、伝統的でオーソドックスな見解である。アリストテレスが最初に貨幣起源説を提起して以来、アダム・スミス、マルクス、メンガー、ケインズなど多くの経済学の巨匠によって受け継がれたきたのが物々交換に代わって貨幣が自然発生的に生じたとする貨幣自生説である。だが、こうしたオーソドックスな見解を真っ向から否定し、「信用」こそが貨幣に先立つ歴史的発展の起源であると強調したのがミッチェル・イネスである。イネスは20世紀初頭、「貨幣とは何か」(“What is Money”)と題する論文と「貨幣の信用理論」(“The Credit Theory of Money”)と題する論文を発表する。このわずか2編の論文をもって、貨幣よりも信用が重要であることを論じ、しかも「信用は貨幣に先立つ」と主張するのである。さらにイネスは2編の論文で、『国富論』における「アダム・スミスの誤謬」を痛烈に批判する。その批判では、『国富論』の分業論で論じているいくつかの具体的な事例に即して、これらの事例が「厳密な歴史的証拠の基盤に立脚していない」と指摘する。もしその批判が当を得ているならば——筆者はそう確信しているが——、「経済学の父」とも「古典派経済学の始祖」とも賞讃されるスミスにも、歴史的事実を正確に把握し得なかったという意味で、大きな問題があったと言えよう。イネスの論文が脚光を浴びたのは、ケインズの *Economic Journal* における書評によるところが大きい。当時ケインズは母校ケンブリッジ大学のフェローを務める傍ら、*Economic Journal* の編集委員でもあった。このイネスの論文は、その後のケインズの著作にも影響を与えたようである。周知のようにケインズは数多くの著作を残しているが、イネスの第1論文への書評に次いで、ケインズは「古代通貨論」という小冊子を書いている。この小冊子は、これまでほとんど注目されなかったけれども、主に古代バビロニアを念頭においた貨幣の起源および貨幣の歴史についてのケインズの見解が提示されている。この「古代通貨論」におけるケインズの見解は、『一般理論』と並ぶケイン

## イネスとケインズの貨幣論

ズの主著『貨幣論』に受け継がれている。

本稿のテーマは「イネスとケインズの貨幣論」であるが、中心となるのは、イネスの一編の論文に対するケインズのわずか2ページほどの書評にある。この書評の実質的な内容は、イネスというまったく無名の研究者と、アダム・スミス（およびケインズ）という経済学の巨星との書評を舞台とする“対決”という構図にある。まさにイネスの論文こそは、「経済学の父」, 「古典派経済学の始祖」への挑戦状だったのではあるまいか。もし識者が判断すれば、その“対決”の結果は明らかであろう。イネスは満63歳の生涯において経済学に関するわずか2つの論文しか残さなかったけれども、これらの論文には、本稿で取り上げなかった貴重な宝物がまだまだ埋まっているように思われる。イネスについての研究はまだ緒に就いたばかりである。

## 参 考 文 献

(以下に引用した文献については、必ずしも翻訳に正確には従っていない場合がある。また、原文献が当用漢字でない場合や旧仮名遣いで表示されている場合は、それを当用漢字や現代仮名遣いに改めた場合がある)

- Bintliff, J. [2006] “Solon’s Reform: an archeological perspective” (in *Solon of Athens: new historical and philological approaches*, eds. J. Bloc and A. Lardinois, Brill, Leiden).
- Dalton, G. [1982] “Barter” *Journal of Economic Issues*, vol. 16, no. 1.
- Davies, Glyn, [1994], *A History of Money, From Ancient Times to the Present Day*.
- Einzig, Paul [1966], *Primitive Money—In its Ethnological, Historical and Economic Aspects*, second edition, Oxford, Pergamon Press (first edition, 1949).
- Ehrenberg, V. [1973] *From Solon to Socrates: Greek History and Civilization*, Routledge.
- Fayazmanesh, Suzan [2006] *Money and Exchange: Folktales and Reality*, New York, Routledge.
- Fisher, Irving [1911] *The Purchasing of Money, The determination and relation to credit and crisis*, New York, Macmillan.
- Graeber, David. [2011] *The Debt; First 5000 years*, Melville House Publishing (酒井隆史・高相岩三郎・佐々木夏子訳『負債論——貨幣と暴力の5000年』以文社, 2016年).
- Hawtrey, R. G. [1919], *Currency and Credit*, first edition, Longmans, Green and Co., London.
- Homer, Sidney [1963], *A History of Interest Rates*, Second edition, New Brunswick,

- Rutgers University Press.
- Humphrey, Caroline [1985] “Barter and Economic Disintegration,” *Man* vol. 20, p. 48.
- Humphrey, Caroline and Stephen Hugh-Jones [1992] “Introduction: Barter, exchange and value” (in *Barter, exchange and value*, edited by Caroline Humphrey and Stephen Hugh-Jones, Cambridge, Cambridge University Press, 1992).
- Innes, A. Mitchell [1913] “What is Money?,” *The Banking Law Journal*, May, pp. 377-408.
- Innes, A. Mitchell [1914] “The Credit Theory of Money” *The Banking Law Journal*, vol. 31, Dec./Jan., pp. 151-168.
- Ingham, Geoffrey. [2004] *The Nature of Money*, London, Polity.
- Karimzaki, Shahzavar [2013], *Money and its Origins*, London and New York, Routledge,
- Keynes, J. M. [1914] “Review” *The Economic Journal*, vol. 24, pp. 419-421 (in *The Collected Writings of John Maynard Keynes (JMK)* ed. by E. Johnson, and D. Moggridge (London: Macmillan) XI, pp. 404-406. 1983).
- Keynes, J. M. [1920] “Review of Currency and Credit,” *The Economic Journal*, vol. 30, pp. 362-365 (*The Collected Writings of John Maynard Keynes (JMK)* ed. by E. Johnson, and D. Moggridge (London: Macmillan), vol. 31, pp. 411-414),
- Keynes, J. M. [(1920-1926) 1982] “Keynes and Ancient Currencies” in *The Collected Writings of John Maynard Keynes (JMK)* ed. by E. Johnson, and D. Moggridge (London: Macmillan),
- Keynes, J. M. [(1930) 1971] *A Treatise on Money* I (1930), 1971 in *The Collected Writings of John Maynard Keynes (JMK)* ed. by E. Johnson, and D. Moggridge (London: Macmillan), 小泉明・長澤惟恭訳『ケインズ全集第5巻 貨幣論 I—貨幣の純粋理論—』東洋経済新報社, 1979年。in *The Collected Writings of John Maynard Keynes (JMK)* ed. by E. Johnson, and D. Moggridge (London: Macmillan),
- Klengel, Horst [1976] *Hammurapi von Babylon und seine Zeit*, VEB Deutscher Verlag der Wissenschaften, Berlin (江上波夫・五味 享訳『古代バビロニアの歴史：ハンムラビ王とその社会』山川出版社, 1980)
- Kuhn, Thomas [1962] *The Structure of Scientific Revolutions* (中山 茂訳『科学革命の構造』みすず書房, 1971),
- Laughlin, J. L. [1931] *Money, Credit and Prices*, Chicago, University of Chicago Press.
- Law, John [1705], *Money and Trade Considered with a Proposal for Supplying the Nations with Money*, Reprints of Economic Classics, Augustus M. Kelly · Publishers, New York 1966.
- Macleod, H. D. [1902] *Theory and Practice of Banking*, six edition, London, Longmans, Green and Co,
- Marx, Karl [1857-1858] *Grundrisse, der Kritik der Politischen Ökonomi* (Rohentwulf, Anhang 1850-1859, Dietz Verlag, Berlin, 1953 (高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』

## イネスとケインズの貨幣論

- (草案), 第1分冊, 大月書店, 1959年).
- Marx, Karl [1970] *A Contribution to the Critique of Political Economy*, New York, International Publishers.
- Menger, Carl [1892], "On the Origin of Money," *The Economic Journal*, Vol. 2, No. 6 (June), pp. 239-255.
- Menger, Carl [1976] *Principles of Economics*, first, General Part, translated and edited by James Dingwall and Bert F. Hoselize, the Institute for Human Studies.
- Mill, J. S. [1878] *Principles of Political Economy with Some of Their Applications to Social Philosophy*, textual editor J. M. Robson, Tront, University of Tront Oress, Routledge & Kegan Paul (末永茂喜訳『経済学原理』全5巻, 岩波書店, 1953-63年).
- Powell, M. A. [1996] "Money in Mesopotamia," *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, vol. 39, no. 3. pp. 224-242.
- Samuelson, P. A. [1948], *Economics*, first edition), McGraw-Hill, Inc. New York.
- Samuelson, P. A. and Nordhaus, W. D. [1989], *Economics* (13th edition), McGraw-Hill, Inc. New York (都留重人訳『経済学』岩波書店, 1992).
- Schumpeter, Joseph A. [1954], *History of Economic Analysis*, New York, Oxford University Press (東畑精一・福岡正夫訳『経済分析の歴史』(上)(中)(下) 2006年).
- Smith, Adam. [1789], *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. in three volumes, the fifth edition, London, A. Strahan and T. Cadell (大河内一男監訳『国富論 I』中央公論社).
- Thrnton, H. [1802] *An Enquiry into the Nature and Effects of the Paper Credit of Great Britain*, London, J. Hatchard (渡邊佐平・杉本俊朗『ソーントン・紙券信用論』実業之日本社, 1948年).
- Tooke, T. [1844] *A Histories of Prices, and of the State of the the Circulation, in 1838 and 1839* (藤塚知義訳『物価史』第3巻, 東洋経済新報社, 1879年).
- Wray, L. R. [2000] "Modern Money" (*What is Money?* edited by Smithin, John, Routledge, London)
- Wray, L. R. [2003] "Money" (edited by J. E. King, *The Elgar Companion to Postkeynesin Economics* (『ポスト・ケインズ派の経済理論』小山庄三訳, 多賀出版, 2009年).
- Wray, L. R. and Stephanie Bell [2004], "Introduction" (Wray (ed.), *Credit and State Theory of Money: The Contributions of A. Mitchell Innes*. Cheltenham, UK · Northampton MA, Edward Elgar.
- 中田一郎訳『ハンムラビ「法典」』古代オリエント資料集成1, リトン, 2002年。
- 古川 顕 [2012] 『R. G. ホートレーの経済学』ナカニシヤ出版。
- 古川 顕 [2013] 「H. D. マクラウドの信用理論」『関西学院大学産研論集』第40号, 3-9 ページ。
- 古川 顕 [2014b] 「H. D. マクラウドと信用創造論の系譜」『甲南経済学論集』第54巻第1・2号, 25-56ページ。



- 古川 顕 [2015a] 「ジョン・ローの貨幣理論」『甲南経済学論集』第55巻第3・4号，211-271ページ。
- 古川 顕 [2015b] 「ジョン・ローのマクロ経済理論」『経済論叢』第189巻第2号，1-18ページ。
- 古川 顕 [2016] 「貨幣の起源と物々交換（1）」『経済論叢』第190巻第1号，35-55ページ。
- 古川 顕 [2017a] 「貨幣の起源と物々交換（2）」『経済論叢』第191巻第3号，1-16ページ。
- 古川 顕 [2017b] 「アリストテレスの貨幣起源説」『甲南経済学論集』第58巻第1・2号，57-98ページ。
- 古川 顕 [2018] 「クナップの貨幣固定説」『経済論叢』第192巻第1号，1-34ページ。